

国語

現代の国語，言語文化

〈近代以降の文章〉

1. 開始の指示があるまで，この問題冊子を開かないでください。
2. 机には，受験票，黒鉛筆，消しゴム，時計以外のものを置かないでください。
3. 受験票と机の上に貼ってある受験番号が同じかどうか確認し，問題冊子と解答用紙のすべてに受験番号と氏名を記入してください。
4. 解答は，すべて解答用紙に記入してください。
5. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は，手を高く挙げて監督者に知らせてください。
6. 不正行為について
 - ① 不正行為に対しては厳正に対処します。
 - ② 不正行為に見えるような行動が見受けられた場合は，監督者が注意をします。
 - ③ 不正行為を行った場合は，直ちに受験を取りやめさせます。
7. 試験終了後，この問題冊子を持ち帰ってください。

受 験 番 号	氏 名

問題は から までで、一ページから十六ページまであります。確かめなさい。

解答は解答番号 から までにマークしなさい。

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

著作権処理の都合により、非掲載となります。

(内田樹『知性について』による)

3 傍線部ウで、筆者が「コモン」という言葉を用いた意図として最も適切なものはどれか。次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 中世ヨーロッパや日本の歴史的事例を通して、公共財の重要性を分かりやすく説明するため。
- ② 個人の富よりも共同体が持つ共有財の豊かさが社会の質を決めることを強調するため。
- ③ 集団に共有され、誰もが利用できる資源としての知性の在り方のイメージを示すため。
- ④ 現代社会において失われがちな公共の富という概念を、原義から再確認させるため。
- ⑤ 国家や経済の発展が個人資産ではなく共有財の管理運営に依存することを示すため。

4 傍線部エで、筆者が読者に「知的に興奮」してもらいたいと考える理由として最も適切なものはどれか。次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 読後に自発的な行動や創造的な発想が自然と湧き、日常に変化をもたらすきっかけとなるから。
- ② 読後に内容を正確に記憶し、長期的に筆者の主張を伝達できるようにする効果を期待しているから。
- ③ 筆者と読者が共に知性を育み、集団全体の知的パフォーマンスを高める共同作業が実現するから。

- ④ 知的興奮が読者の集中力や理解力を活性化し、集団での議論にも粘り強く向き合えるようにするから。
- ⑤ 読者が筆者の考えに深く共感し、その意見や価値観を積極的に受け入れるようになることを願うから。

5 傍線部オ「読者の肺活量」という表現がある。これについて、最も適切に説明されているものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 難解な文章を長時間読み続けられる精神的持久力。筆者は文章量を増やしてそれを鍛えようとしている。
- ② 文章処理の速度や理解力。筆者は短文を多用してその能力を高めようとしている。
- ③ 内容を深く考察し独自の解釈を生み出す力。筆者は多義的な表現や事例を示して刺激している。
- ④ 新しい知識を受け入れる許容量。筆者はあえて「変なこと」を書き、読者の許容を広げようとしている。
- ⑤ 難解な文を耐えて読み続けられる持久力。筆者は短文で区切り、振り返りを添えることで徐々に高めようとしている。

6

傍線部カ「読者に対する親切心」について、本文の文脈から読み取れる筆者の姿勢とは何か。最も適切に説明されているものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 複雑な内容を読者が不安にならず、最後まで読めるよう配慮する姿勢。
- ② 読者の知識水準に合わせ、難解な語や構造を避けて理解を助ける姿勢。
- ③ 読者の誤解を防ぐために、要点を繰り返し確認できるようにする姿勢。
- ④ 読者の理解の助けになるように、具体例を豊富に用いようとする姿勢。
- ⑤ 読者の多様な感情や意見を尊重し、多様な解釈を許容する柔軟な姿勢。

7

この文章全体を通して、筆者が最も強く伝えようとしている中心的な主張は何か。最も適切に説明されているものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 読者の理解力に寄り添いながら、文章の可読性を高める工夫が書き手に求められるという姿勢。
- ② 個人主義にも集団主義にも与せず、独自の立場から社会の構造や価値観を問い直す必要性の提示。
- ③ 読者の知的感受性を刺激し、思考や行動を励ますような文章表現を目指すという創作理念の表明。
- ④ 現代社会の貧困はコモンの衰退に起因し、公共の富の再生が社会の質を左右するという問題提起。
- ⑤ 知性とは個人に属する能力ではなく、集団の中で活性化される公共的資源であるという認識。

二

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

春がきた。

ところが少年はねむいどころではなかった。朝も起こされなくてもちゃんと目をさます。とびおきて蒲団をまくりあげ、前の晩から寝押し^{注1}しておいたズボンをはいて、すぐ洗面所へ行く。

父の櫛^{くし}を水でぬらして、鏡の前で寝ぐせのついた髪をとかす。それから、父がひげを剃^そったあとに使うアメリカ製の白い粉を必要もないのに顔に塗^ぬつてみる。中学生の顔洗いはずいぶん長くかかる。彼は歯が乱^ごぐい歯なのと、いくらみがいでも白くならないことでいらして、それでいつも時間をむだにしようのである。

彼がめかしているあいだ、癩癬^{かじく}もちの小さな男の子がいる隣りの家ではきょうも朝早くからおもちゃのピアノの音がしていた。誰も弾いていないのに鳴っているというふうには、ガラスの楽器のような澄んだ音がする。

水をつかいながら、少年はいけないことだと感じながらもつい隣りの家のほうをのぞいて見るのだった。青いこまかい葉をいちめんにつけた藤棚のむこうは繁^かみの蔭^{かげ}で暗いほどだった。その暗い部屋からピアノの音はしていた。

春がきたのだ、と少年は思った。春がきたことがこんなにうれしいことはいままでになかった！

彼はもう一度、鏡の中を見た。鏡にうつっている少年はわざとのように浮かない顔をしていた。その顔はこういつているようでもあった——僕にはほんとうのところよくわからない。彼女が好きなのかどうか、これが好

きだということなのかどうか。わかつているのは、彼女のことを考えはじめるともう何にも手がつかないということだ。

少年はその顔で食堂へ行った。父はもう出かけたあとだった。

母と二人でする食事のさいちゅう、彼は何度も子供部屋の柱時計に目をやった。彼は食べたくない。それでもなんとか食べようとするのは母にありしめないようにするためである。

母はたえず少年を観察している。

「あんたが勝手に起きてくれるから、おかあさん、とても助かる。」

「朝みんなとソフトボールをやるから。」

彼は口をうごかしながらいふ。

「だから、早く行って場所をとらなきゃならないから。」

少年は母にうちの時計は正確かどうかときいた。母は狂²つていても一、二分だといった。でもその一、二分が彼には問題だった。少年は毎朝^{注2}「百合^{注3}」の生徒たちが乗る江の島行きの電車で家を出るのである。

彼女はその十分前に玄関を出てくる。

おたがいの家は五十メートルと離れていないのにうまく出会うことはとても少なかった。少年は歩きながらしょっちゅう道の前とうしろに気をくばり、わざとのろろ歩いたり急に思いなおして早足になったりした。そして駅へ着いてからほんの一、二分のあいだ、向かい側のホームに彼女が靴^{くつ}をさげて一人でぼんやり立っているのや同級生とおしゃべりしているのを、あまり見すぎないように意識して見るのであった。

その朝、彼女がちょうど門から出てきたところへ少年が行った。少年の心はおどった。まだ二十メートルもはなれていた。その二十メートルを彼

はうつむいて歩いた。

彼女は門のそばの石垣にもたれるようにしていた。——頭をかしげて、年上らしい落ちついた目をして。

「おはよう。」

彼女のほうから大きな声でいった。

少年はもつと近づいてから、それも小さな声でしかいえなかった。彼は何かいわれてもただおどおどするだけだった。そしてひどく急ぎ足になった。

彼女は小走りしながら腕時計を見た。

「何分の電車に乗るの？ おくれそう？」

「さあ、どうかな。」

彼は逃げるようにして、わき目もふらずにとつと歩いた。

「じゃあ走れば。いっしょに走ってあげる。」

そこで彼は走りだした。これはおかしいことになったと思いつつながら。

彼女も走ったけれど、たちまち少年にひきはなされた。彼はかまわず走りつづけた。走りながらやっぱりどうしても彼女が好きなのがわかった。好きだ。彼はうしろも見ずに走った。

彼女は途中でのびてしまっていた。少年がふりかえると、手で小さなバイバイをして先に行けといった。

「おくれるといけないわ。」

で、彼はまた走らなければならなかった。

夕方学校から帰つてくると、少年はまっさきに通りへ出て、斜むかいの

家の勝手口から目をはなさないようにした。雨さえ降らなければ彼の見張りには毎日かさず同じ時刻におこなわれた。その時間になると彼女がちいさな弟たちを夕飯に呼び出してくるからである。

彼女のすがたが見えると少年はもうじつとしていられないので、彼が相手にするには幼すぎるような子供たちと遊戯に熱中するふりをした。そのあいだも頭はひとつのことではいっばいだった。——自分の気持を相手に知らせる決心がつくかしら。でもどうやって？ それを考えると彼の心は早くもしぼんでしまうのだった。

その晩も彼女は少年の家の前まで来ていた。すこしはなれると、顔はもうよく見えなかった。彼女は何度も弟たちの名前を呼んだ。

彼は小さな男の子たちを相手にますますはしゃぎながら、夕闇をすかしてたえず彼女の姿をさがした。

彼女は待ちくたびれたように門柱にもたれて、生垣のあすなろうの葉を一枚ずつ摘みはじめた。小さくたたんだハンカチを片手に握りしめて、ほそい指で葉をむしっては鱗のようにばらばらにした。

少年は何か話しかけなくては、と思った。だけど話すこともとっさには浮かんでこなかった。彼は大した考えもなしに先週から藤沢の映画館でやっているアメリカの動物映画の題名をいった。

「あの映画、二回も見ちゃった。」

「そうなの。」

彼女はとても驚いたというように彼の顔をのぞきこんだ。

「映画はあまり見ないわ。眼鏡をかけなきゃならないから。」

そして首をすくめて笑った。

それから彼女は少年の知らない宝塚か何かのスタアのことを女の子どうしでするようにあだ名で呼んで、

「むかし、あのひとに夢中だったけれど、いまはそれほどでもないわ。」
といった。

「そう。」

少年はあいづちをひとつ打つのにもおかしなくらい力んでしまうので、相手が笑い出しはしなないかと思った。彼女は彼に学校がおもしろいかときいた。彼はどっちともうまく答えられなかった。

「高校へ行くと選択科目っていうのがあるのよ。私はいま数学と手芸をとってるの。でも勉強は好きじゃないから大学まで行くかどうかわからないわ。」

少年はそんな先のことで考えたことはなかった。彼は黙っていた。

「うちは父がいないから。」

そういつて彼女は口をつぐんだ。

彼女の父が東京ですつと会社員をしていたこと、それから兵隊にとられて南方で戦病死したことをいつか彼の母が話していた。彼は何かいおうとして言葉をさがした。

けれども彼女は一瞬後にはまた明るい顔つきになっていた。

「でもよかったわ。あなたのお父さまは元気で帰っていらして。そのときはうれしかったでしょう。」

少年は苦笑してみせた。そしてわざとどうでもいいやという調子で答えた。

「でもおやじはね、生きて帰ってくるんじゃないかって、そういつてる

よ。」

「だってそんなことはないわ。嘘よ、そんなの。」

そのとき通りのむこうの端で誰かが外灯をつけた。子供たちは一人のこらず姿を消していた。

「嘘よ、そんなの。」

彼女はもう一度そういつてじつと彼の目を見つめた。外灯の光で今度ははっきり顔が見えた。

彼女が行ってしまつてからも少年はいつまでもその場にぐずぐずしていた。自分がいつた言葉のものの欲しさに気づいて、後悔にくるしみながらじつと外灯のあかりに目をこらした。

しかし父が帰ってきたことがいまでもそんなにうれしいかというと、それは少年にもうまくいえないのであった。

「おれはなにも帰つてきたくて帰つたのじゃありません。」

少年の父はよく母と衝突してそういう。そんなとき彼はほとんど母を憎みそうになる。

彼の父はしばらく前から横浜のある銀行に雇つてもらつて日掛け貯金の集金人をしていた。父はもう老人であった。一日歩きつづけるとあくる朝なかなか起きあがれなかった。そして疲れているのでますますものをいわなくなつていた。——こういうことはみんな父の言葉が嘘でないからだとして少年は思ふのである。

父は小さいときから少年のあこがれだった。その父が負けて帰ってくるとは思わなかったのだ。負けることが軍人の子にとつてどういうことであ

るか、彼は考えたこともなかったのである。

日本の兵隊は貨車につめこまれて帰ってきた。貨車の外にもぶらさがっていた。鉄の扉のかけから鼠ねずみのように顔だけ出している兵隊もいた。それでもあふれた組は機関車の排障器注7や連結台につていた。駅には陽気なアメリカ兵がいっぱいいて、きたない貨車が着く度に口笛を吹いたりやじったりした。少年は学校の行き帰りに踏切りや焼けぼっくりの柵のあいだから手をふった。けれども日本の兵隊はめったに手をふらなかった——出征のときあんなに手をふった彼らが。くる日もくる日も貨車は通った。そしてまもなく少年の父も帰ってきた。何年も彼が写真だけで見慣れていた父と

X。

夕飯のあと、少年は一人で食堂にいた。父が帰ってこないうちにさつさと自分の部屋へ引き揚げたものかどうか迷っていた。母が食事のときのつづきで台所へ行ってからもまだ彼のことであらうとぐちをこぼしていたから。

少年は流しの水の音と母のぐちとが交互に聞こえてくるのを耳で楽しんでいたのである。ひとつだけ母がいまにもいい出しそうではないことがある。それを早くいったらどうだ——そんな臆病な期待から彼はそこにねばっているのである。

やっと話がそこへまわってきた。

「……とにかくあの娘ことつきあうのは、おかあさんは反対。そのせいじゃないの、このごろ急にそわそわして家に居つかなかったのは。」

そして水道の蛇口をきゅっとひねった、自分の口をひねるみたいに。

「ちがうよ。」

少年は水道のうなる音に消されまいとして、仕切りのガラス戸越しにばかに大きな声を出したものだ。

母は最後に蛇口の栓をしめて、洗ったふきをひろげて掛けるくらいの間をおいてから、彼に負けない大きな声でいってよこした。

「そうですよ。」

少年は苦笑した。そしてなんだかつらくなって、そっと席を立った。

春休みもおわってまた学校がはじまった。

一日のあとにくる夕暮れの時間は長くなった。子供たちはあいかわらず暗くなるまで通りで遊んでいた。けれども少年はめったに彼女を見かけなかった。新学期になってから彼女の生活が変ったらしいことに彼は気がついた。

少年はすっかり夜になってから斜むかいの家の前を垣根に沿って行ったり来たりした。ときどき立ちどまって、こわれた竹垣のすきまから中をのぞいてみた。——庭の中ではまだ彼女の小さな弟たちが歯をくいしばって格闘したり怒鳴り合ったりしていた。やがてそれもやむと母親が雨戸を引いた。そして家も庭も闇につつまれた。少年は家の中で彼女の声がするようない気がしていつまでも耳をそばだてた。

そういう日がずつとつづいた。そして、六月の雨のふる日曜日、少年が玄關のポーチに出てはんやり立っていると、目のまえを彼女が赤い傘をさして通りかかった。

彼女は彼がいるのを見つけて門の外から声をかけた。

彼は、どうしよう、と思った。

彼女は傘をたたんでポーチに駆けこんできた。首すじを雨にたたかれて明るい悲鳴をあげながら。

そのとき彼は何を話したろう。たくさんのことをいおうとしてけっきょく何もいえなかったような気がする。ポーチには彼女が髪につけている香水のかおりが満ちた。その大人びた薫りが少年を酔わしてしまったのである。

彼女は立ち話のあいだ、腕をのばして廂から落ちる雨の雫を手のひらに受けていた。雨滴はときどき中心をそれて、時計をはめた彼女の白い手くびにあたってはねた。

と、そのとき、少年の父が植込みのすぐむこうの便所にはいった。鉄格子のはまった横の窓がほそくあけてあったので、父が前を向いて立っているのが見えた。

少年は目をそらした。

彼女は彼の顔色に気づいてちらつと窓のほうへ視線をやった。そしてまた話をつづけた。ところが少年の父は猛烈な咳ばらいさえたのだ。

父は帰りがけに、窓ごしに何ごとか早口でいった。乱暴な口調であった。少年には聞きとれなかったけれど、彼女は顔色を変えていた。

「しかられるわ。」

「いいんだよ。構わないよ。」

彼は動揺して反抗的にいった。

「でもあなたに悪いわ。」

彼女があわてて傘もささずに庭から出て行ったあと、少年はしばらくそ

こに立って、彼女がしていたように手のひらで雨水をうけた。だが雨滴はぶるぶる震える彼の手からそれでシャツの袖口に飛び散った。

ポーチには彼女がのこしたあまい匂いがなかなか消えずにいた。

彼は家の中へはいった。

母が待ちかまえているのがわかった。

「さっきのはあの娘でしょう。またつきあってるの。」

母は父にも訴えたいような顔をした。

「しばらく遠ざかっていようだと思ったら、またはじまった。」

父はうるさそうに答えた。

「かまわんじゃないか。話ぐらいしたって。」

そして少年にはこういった。

「話がしたいんだったらちゃんと自分の部屋へあけて話さない。あんなところで立ち話するもんじゃない。」

それで少年はさっき父が便所の窓から何かいったのはそのことだったのだと思いあたった。

だが、おそすぎた！ 彼はその日を最後に二度と彼女に会うことがなかったし、彼女の誤解をとくこともできなかったのだから。

夏休みになった。

少年は彼女が東京の学校へ転校したことを知った。疎開してきていた一家はまた東京へ引き揚げるので、彼女だけがひとあし先に移って行ったのである。斜むかいの家ではぼつぼつ家をたたもうとしていた。

(阿部昭「幼年詩篇(あこがれ)」による)

注1 寝押し——ふとんの下に衣類を敷き、その上で寝ることによって、しわを伸ばしたり、折り目を整えたりすること。

注2 「白百合」——しやうはく湘南白百合学園中学・高等学校。神奈川県しやうな湘南地方にある女子校。

注3 江の島——湘南地方の島。ここではその近くにある駅を指す。

注4 あすなろう——ひのきに似た常緑樹。あすなろ。

注5 藤沢——湘南地方にある都市。神奈川県藤沢市。

注6 日掛け貯金——毎日少しずつ積み立て貯金すること。

注7 排障器——電車の走行中に、線路上の障害物を除去する装置。

※本文中には、現代では使用されていない表現が用いられているが、原文を尊重し、原文通りの記載とした。

8 傍線部ア「これはおかしいことになった」とあるが、この部分の解釈として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 少女と一緒に過ごせる時間を楽しみにしていたのに、彼女がそっけない態度をとったので、その場を離れたくなってしまったということ。

② 少女と一緒に過ごせる時間を楽しみにしていたのに、彼女を避けるような態度をとったせいで、嫌っていると誤解されてしまったということ。

③ 少女と一緒に過ごせる時間を楽しみにしていたのに、彼女が遅刻

を怖れて小走りになったので、急がなければならなかったということ。

④ 少女と一緒に過ごせる時間を楽しみにしていたのに、気後れして足を早めてしまったせいで、急いでいると誤解されてしまったということ。

⑤ 少女と一緒に過ごせる時間を楽しみにしていたのに、いざとなると緊張してしまい、彼女のそばから逃げ出したくなってしまったということ。

9 傍線部イ「彼はまた走らなければならなかった」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 少年には急ぐ必要がなかったが、今さら立ち止まっても彼女に何を話せばいいのかわからなかったから。

② 少年には急ぐ必要がなかったが、彼女が途中でのびてしまうほど速く走ってしまったので、気まずくなったから。

③ 少年には急ぐ必要がなかったが、彼女の誤解を訂正することでもさず、走るのをやめられなくなってしまったから。

④ 少年には急ぐ必要がなかったが、彼女が急いで乗ろうとしている電車に、自分も一緒に乗りたいと思ったから。

⑤ 少年には急ぐ必要がなかったが、自分と一緒にいたくなさそうな彼女のために、その場を去ろうと思ったから。

10 傍線部ウ「少年は苦笑してみせた。そしてわざとどうでもいいやとい

う調子で答えた」とあるが、その理由を説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 父自身は生きて帰るのではなかったと言っており、自分も父の帰りをうれしいと思うことができなかったから。

② 父が帰って来たことを素直に喜んでしまうと、戦争で父を亡くした彼女を怒らせるのではないかと思ったから。

③ 父自身は生きて帰るのではなかったと言っており、家で母と衝突してばかりの父を憎らしいと思っていたから。

④ 父が帰ってきたことを素直に喜んでしまうと、彼女に子供っぽく見られるのではないかと思ったから。

⑤ 父自身は生きて帰るのではなかったと言っており、子供の前でそんなことを言う父はひどいと思っていたから。

11 傍線部エ「自分がいった言葉のものの欲しさに気づいて、後悔にくるし

みながら」とあるが、この時の少年の心情を説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 父を亡くした彼女の気持ちを理解できず、父など帰ってこなければよかったという本音をうっかり口にしてしまった自分の軽々しさを残念に思っている。

② 父を亡くした彼女の気持ちに配慮せず、彼女の前で格好をつけたくなって、父の帰りを喜ばないふりをしてしまった自分の浅はかさ

を反省している。

③ せっかく彼女と二人で話す機会を持てたのに、彼女にばかりしゃべらせてしまい、気の利いた話題を出せなかった自分の不甲斐なさに呆れている。

④ 父を亡くした彼女を元気づけようと、父が帰ってきたところで喜ばしくはないと伝えたのに、彼女の同意が得られなかったことをくやしく思っている。

⑤ せっかく彼女と二人で話す機会を持てたのに、彼女への思いを伝える勇気が出せず、彼女に察して欲しがらばかりだった自分の小心さにかっかりしている。

12 空欄 X に入る言葉として最も適切なものを、次の①～⑤

の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 別人のようになって

② 寸分たがわぬ姿で

③ 打って変わって楽しげに

④ 同じ笑顔のまま

⑤ あまり代わり映えもせず

13

傍線部オ「臆病な期待」とあるが、この部分の解釈として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 彼女と親しくすることに母が文句を言うのが予感できており、それをどうにかやり過ごし続けていれば、そのうち母は理解してくれるはずだと思っているということ。
- ② 彼女と親しくすることに母が文句を言うのが予感できており、それを恐れるあまりに、どうにか母がそれを口に出さずに済ませてくれるのを願ってやまないということ。
- ③ 彼女と親しくすることに母が文句を言うのが予感できており、それを回避するために、母の注意をそらしてくれそうな父が早く帰ってくるのを待つしかないということ。
- ④ 彼女と親しくすることに母が文句を言うのが予感できており、それを聞かずに済ませるために、さりげなく自分の部屋に戻る機会を必死にうかがっているということ。
- ⑤ 彼女と親しくすることに母が文句を言うのが予感できており、それに反発したい気持ちはあるものの、母の方で言及してくれるまでは何も切り出せないということ。

14

傍線部カ「彼女は顔色を変えていた」とあるが、この時の彼女の心情を説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 少年と玄関先でこっそり立ち話をしていたところを見られてしまったので、少年の父から行儀の良くない娘だと非難されるのではないかと恐れている。
- ② 少年と玄関先でこっそり立ち話をしていたせいで、よその家のポーチに強い香水の匂いを残してしまい、少年の父から迷惑がられてしまったと悔やんでいる。
- ③ 少年と玄関先で親しく立ち話をしていたせいで、彼女と息子が親密になることを良く思っていない少年の父から、少年が叱られるのではないかと心配している。
- ④ 少年と玄関先で親しく立ち話をしていたつもりだったが、少年は父を利用して、うるさくつきまとってくる彼女を追い払おうとしたのだと思い、動揺している。
- ⑤ 少年と玄関先でこっそり立ち話をしていたところ、少年の父が無礼な態度をとったので、息子である少年ともこれ以上関り合いたくないと感じ、幻滅している。

三

次のA～Cのそれぞれの設問に答えなさい。

A
 [15]～[18]の各文のカタカナの傍線部を漢字に改めたとき、傍線部がそれと同じ漢字であるものを、それぞれ後の①～⑥の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

15

もはや手のホドコしようがない。

- ① 手続きのためにシホウ書士の手を借りる。
- ② 政府が新たなシサクを打ち出した。
- ③ あまりシヨウ末節にこだわりたくない。
- ④ その問題を有識者会議にシモンすることになった。
- ⑤ 規則をシイ的に解釈するのは問題だ。

16

彼は政府からハケンされた大使だ。

- ① 年を経るにしたがって問題はケンザイカしてきた。
- ② ケンコンイッテキの勝負に出ることにした。
- ③ 本社を念願だったシュトケンに移転した。
- ④ 経営はケンジツで、決算の時期も安心である。
- ⑤ 西暦八九四年にケントウシは廃止された。

17

三十年前と比べると、カクセイの感がある。

- ① あたりが暗くて、物のリンカクがはっきり見えない。
- ② AIの発展によって、多くの技術カクシンが起きた。
- ③ 怯えた猫に近寄ってしまい、イカクされた。
- ④ 大昔のチカク変動の跡がまだ残っている。
- ⑤ 感染の疑いがあつたのでカクリすることになった。

18

早めの回答をウナガした。

- ① 親の代からソクセイ栽培の野菜を育てている。
- ② 今日の夕食はソクセキ麺で代替しよう。
- ③ この試合、彼はソツコウでシュートを決めた。
- ④ オクソクで結論を出すのは危険である。
- ⑤ 家族一同の無病ソクサイを祈願する。

B

[19]～[22]の各文の意味を持つ語句として最も適切なものを、それぞれ後の①～⑥の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

19

物事の本質や大勢をよく見通すこと。

- ① 客観する
- ② 傍観する
- ③ 観応する
- ④ 達観する
- ⑤ 観覧する

20 他人の誤った言動を自分への戒めとすること。

- ① 対岸の火事
- ② 爪の垢を煎じて飲む
- ③ 他山の石とする
- ④ 薰陶を受ける
- ⑤ 怪我の功名

21 物事が複雑でわかりにくいこと。また、その様相。

- ① 紛糾(ふんきゅう)
- ② 迂闊(うかつ)
- ③ 錯綜(さくそう)
- ④ 弥縫(びほう)
- ⑤ 喧伝(けんでん)

22 物事を深く考えずに、軽々しく行動すること。

- ① 唇齒輔車(しんしほしや)
- ② 意気衝天(いきしょうてん)
- ③ 輕薄短小(けいはくたんしょう)
- ④ 輕挙妄動(けいきやもうどう)
- ⑤ 不言実行(ふげんじっこう)

C 次の文中の空欄 23・24 に当てはまるものとして最も適切なものを、

それぞれ後の ①～⑤の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

一八七八年、現在の大阪府の富裕な商家に生まれた 23 は、十代のころから短歌の創作を始め、恋愛を大胆に詠みこんだ歌集 24 で注目を集めた。また日露戦争時の『君死にたまふことなかれ』などの詩や、『源氏物語』の現代語訳などでも知られる。

23

- ① 正岡子規
- ② 与謝野晶子
- ③ 樋口一葉
- ④ 平塚らいてう
- ⑤ 島崎藤村

24

- ① 『青鞥』
- ② 『大つごもり』
- ③ 『歌よみに与ふる書』
- ④ 『みだれ髪』
- ⑤ 『若菜集』

(以上で問題は終わります。解答票の解答番号 25 以降は使用しません。)